# よみがえれ、町家

## 恵那市岩村町空き家再生への道

２０１４．０６～１１

城下町ホットいわむら

# よみがえれ、町家

## これまでの取り組み

**【introduction】**

恵那市岩村町は、かつて岩村藩の城下町として栄え、明治以降は岩村電気軌道の開通等により、恵南地域の中心地として、多くの人や物資が行きかう町でした。

その岩村町も昨今の車社会の到来等により、城下町エリアの空洞化が進み、商店や住居として活用されてきた城下町ならではの町家建築もだんだんと空き家が目立つようになりました。

空き家の増加は、岩村町の観光活性化において景観を損ねるだけでなく、老朽化による倒壊の恐れ、防犯・防災上にも影響があり、不動産業者では扱いづらい上、住民が減少し高齢独居の多くなった地区では、お祭りに参加できなかったり、コミュニティを維持していくことが困難になってしまいます。

こうした現状を踏まえ、ホットいわむらでは空き家対策を検討・実施を行い、次代につながる町家活用等に取り組んでいます。

ホットいわむらの空き家対策は次のような取り組みを行ってきました。

**空き家所在地の調査**

ホットいわむらでは、まず空き家が町内のどこにあるのかを把握することから始め、平成 24 年に町内の各自治会長にアンケート調査を行い、地区ごとの空き家所在地の把握に努めました。

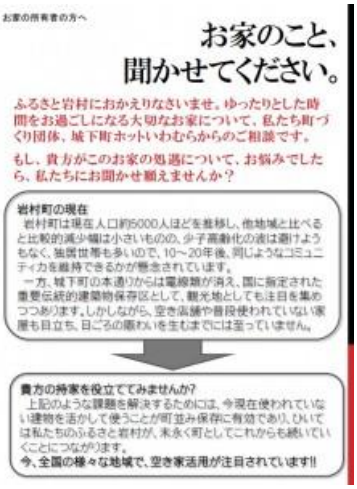
さらに平成 25 年には、空き家と目される家屋に、今後の意向を伺うアンケートをポスティングし、家主さんからの回答を得ることもできました。

その他ホットいわむら総会にて、100 名を越す会員に情報提供を呼びかける中、実際に紹介を受け家主さんとのコンタクトをとることのできた事例もありました。

こうして集まってきた空き家所在地の情報をもとに、空き家対策の方向性を検討しています。

（課題）情報の大半が城下町エリアに集中し、岩村郊外の情報の充実が求められています。実際移住を希望される方からの相談として多くを占める田園エリアの方に空き家が少ない、という印象もあります。

**恵那市空き家バンク物件登録の推奨等**




ホットいわむらと行政の連携のもと、増え続ける恵那市への移住希望者への物件情報を増やすことができるよう取り組んでおり、所有者アンケートなどで意向の確認できた家主さんには、恵那暮らしサポートセンターが運営する空き家バンクへ物件登録していただくことも勧めています。

家主さんに持ち家の処遇について空き家バンク制度を紹介することで、不用品の処置や、補修等利活用の壁となるものについて柔軟に考えていただきたいと考えており、実際の登録に結びつけられた事例も出ました。（空き家バンク制度については恵那市 HP をご覧ください）

（課題）城下町エリアの空き家は、重要伝統的建造物群保存地区に指定されていることもあり、容易に改装、取り壊しの措置がとれません。さらにそのような物件の多くが 100 年を越すような木造建築です。一度人の手が離れると、老朽化のスピードも速く、家主さんが手放す意向のものでも、実際に使えるようにするには、大幅な補修が必要とされてます。

## 移住・利用希望者への対応

岩村町に住みたいという方からご相談を受ける機会も増えてきています。空き家バンク利用者登録制度の紹介など、恵那暮らしサポートセンターと連携し、最適な物件をマッチングできるような、仕組みづくりに取り組んでいます。

（課題）前記のように、城下町エリアでは改修費用の問題、田園エリアではそもそもの空き家がないことで、現在ご紹介できる物件がほとんどない状態にあります。いち早い家主さんとの調整が望まれています。

## ワークショップ・見学会等の企画・開催

岩村の空き家には、家主さんの所有物が残っていることも多く、また老朽化の進行によって、すぐに利活用できない建物ばかり残っているのが現状です。しかし、かつての生活の名残を収めた古い建物は、現代の生活様式に慣れた私たちにとっては、まさに未知の世界。少しでも多くの方に、岩村で築かれてきた生活の一片を感じてもらい、次代につながる利活用を考えるワークショップや見学会を開催しています。

**●2013年9月開催　ホットいわむら×慶応大学サークル"ヒヨシエイジ"「町家清掃ボランティア合宿」**

空き家になって荒れてしまった町家を、「寝泊りができるようになるまできれいにしてみよう」と、学生サークルの方々と不用品整理と室内清掃に取り組みました。また実際に泊まってみた感想をもとに、学生さんたちの自由な発想で、建物の利活用案についてアイディア交換等を行いました。（※"ヒヨシエイジ"は、慶応大学日吉キャンパス周辺の地域住民と学生有志が連携に取り組むプロジェクトです。）

**●2014年1月開催　岩村暮らし探訪町歩き**

岩村での暮らしに関心を持つ方を対象に、古い町家の残る伝建地区での生活を身近に感じながらイメージを膨らませてもらうというもので、所有者の方から了承を得た数軒の空き家・空きスペースの内覧も実施しました。

（課題）ワークショップや見学会は、古い町家建築への興味関心を深めることはできるものの、実際に中を見てしまうと「住む」や「使う」ことへのハードルの高さを感じてしまうことも確かです。具体的な利用者の掘り起こしが望まれています。

## 広報活動

空き家問題をより多くの住民の方に知っていただき、関心を高めていけるような、広報活動を行ってきました。ホットいわむらが独自で発行し、町内回覧で岩村町各世帯に配布される広報誌「ホットいわむらだより」に、取り組みについての特集記事などを掲載する他、ホットいわむらホームページ等で、より広範囲で情報共有を図っていきます。

## 他地域との情報交換等

岩村町に限らず、恵那市には多数の空き家が存在しており、各地域でさまざまな対策が行われています。特に、串原地区「NPO 法人奥矢作森林塾」の取り組む「古民家再生塾」は、「平成25年度全国過疎地域自立活性化優良事例」として表彰されるなど、全国的にも空き家対策の先進地として知られています。こうした身近なつながりを活かし、より有効な対策を立てていくため、各地域との連携に取り組んでいます。

# 空き家利活用実践ワークショップ

前項までの流れを受けて、平成26年度、城下町ホットいわむらでは、町内の空き家・空きスペースを対象に、有効的な利活用に向けたワークショップを開催し、さらに空き家が資源として認識されていくために、一般の参加者が実際に建築に触れ、補修等に携わりながら体感的に学べる機会として企画されました。

このワークショップは以下の取り組みを中心に行われました。

- 空き家となっている町家の不用品整理
- 家主さんや利用予定者の意向に沿った簡単な補修
- 地元建築士や大工職人が指導役で参加し、建築の歴史や構造的な興味に答える

ここからは、私たちが空き家をどうやって解消していくかという問いへの、ワークショップを通して得られた気づきと学びの記録をご紹介します。

# 第１弾　2014.06.21　at Ｙ邸

ちょうど夏至の日に開催された最初の空き家利活用実践ワークショップは、公募を含め、総勢 15 名の参加者が集まりました。

会場となったY邸は、もともとダンボールの出荷を行っていた住居兼作業場で、大きく3つの棟から成り立っています。かつてはそれぞれの棟に複数の家族が住んだこともある、という、今でいうシェアハウスのような使い方もされていたとのこと。

しかし先代の家主さんがお亡くなりになってから、10年ほどは使われずに空き家の状態へ。

そこへ1年前に東京に住む今の家主さんが岩村に立ち寄られた際に、町の方を通じて、「空き家になっているがどうしたらいいものか」という相談を受けたことから、話が始まりました。

とは言っても、建物の傷みからは、ちゃんと整備をしようと思えば、相当な金額がかかることが目に見えてわかります。

そこで私たちが考えたのは、いろんな人に見てもらい、体感してもらい、町家が魅力的な空間であることを知ってもらおう、ということでした。具体的には、通りに面した一画をイベント等で使えるぐらいまでに整備して、この建物のことを知る人を増やしていきながら、活用への糸口を探ることを目的とした計画をしました。

**【不用品整理】**

かつてダンボールを扱う作業場だったこともあり、用途を失ったダンボールが大量に保管されていたので、これらの整理・廃棄を行いました。

不用品が積まれていた木製のパレットや床がことごとく腐ってしまっていたので、取り除く作業も行った結果、コンクリートの土間が現れました。

**【用具置き解体】**

中庭に立っていた手作りの用具置きは、保存するメリットがないと考え、解体することに。解体には一般参加の女性に用具の使い方などを指導しながら、作業をしてもらいました。また解体の結果、建物にできた隙間を防水シートで覆う作業も、別の参加者に加わってもらいました。

⇒

⇒

⇒

**【レクチャー・感想等】**

今回の作業が、単純なボランティア作業だけでなく、空き家対策の考え方を共有していくためのものであることを理解していただくために、これまでの空き家対策の取り組みを紹介。参加者には作業に当たった感想を出していただき、空き家状態が長く続く事の影響について理解を深めていきました。また、夜には交流会を開催し、家主さんや関係者、参加者それぞれの想いを語り合える場となりました。

**【まとめ】**

今回は家主さんにも東京から来ていただいたり、町の大工さんたちが WS のメンバーとしてそばにいることで、参加者のちょっとした疑問や興味に、いろいろな角度から答えを得ることができた様子でした。

建物が古いだけに、往時をしのばせる遺物がどんどん出てきて、昔のものに興味を持つ参加者にとっても満足が高く、作業の手が止まることもしばしばありましたが、これもまた醍醐味の一つ。

また片付け以外でも参加者の体験できる作業があることで、興味深い WS になってきます。バールを持って解体してもらったり、防水シートを普段持つことのない機具で打ち込んでみたり。本職の指導もあるので、参加者は本格的な作業をしている気分を味わうことができます。作業自体は多少遅くなっても、参加者の目的をよく汲み取って、普段できない体験をしてもらうことで、WS としての一体感がたかまることがわかりました。

レクチャーの時間は、作業の方でだいぶ疲労感があったので、足早な説明になってしまったのは反省点ですが、その分交流会でたっぷり各自で話のできる時間がとれました。

片付け後は、想定していた以上のきれいになった状態が現れたので、次の展開が想定しやすくなったと同時に、課題も大きいことがわかったのが、今回最大の成果となりました。

作業中、町のいろいろな人が様子をのぞきに来て「一体何事？」と興味をひいていました。普段関心のない人たちにも、古民家や空き家に対する私たちの興味関心を具体的な形で知ってもらう、という意味でも開催したことに意義があったと感じました。

**【参加者感想】**

- 自分のうちの整理をするより楽しかった。
- 老朽化がどのように進んでいくのかを考えながら作業をすることができた。
- 隣の市から来たがそこにも旧家が残っている。そこをどうにかしたいと思ってるけど、岩村の取り組みを参考にしたいと思ってきた。
- 何かに使ってもらうのにはどうしていったらいいのか、片付けをお手伝いするまではできるけど、その先を考えないといけない。
- 片付けをすることで活かす道が少しずつ見えてきた。
- 他の地域で空き家対策をしているが、人数が集まってるのがすごい。空き家⇒片付いた状態への目に見える変化があってわくわくした。ああしたいこうしたいという想像が出てくる。
- たくさんの人が集まるとすぐに片付けられる。いかに人を集められるかを考えたい。

# 第2弾　2014.7.27　at S邸

梅雨が明け、夏の暑さが本格的となった頃、2回目となる空き家利活用実践ワークショップを開催しました。

今回の会場となった町家は、空き家となって不動産業者に出ていたところを、「自分が買って守りたい」という意志で今の家主さんが購入されたもの。

もともと表具屋さんだった家主さんがご自身で、一階の表部分を改修、今では週末などにレンタルスペースとして貸し出し、ちょっとしたお店やギャラリーに、その一つ奥の座敷を事務所として貸し出すなど、積極的な活用をされています。

今回の改修計画は、2階部分を将来的に**遠方から出店しに来た方の泊まれるスペースなどにしたい**ということで、ワークショップでは改修にあたって必要なことを地元の大工さんたちと一緒に考えていきました。

**【家主さんからの説明】**

はじめに今回同席していただいた家主さんに、建物の入手から現在までの活用の経緯を説明していただきました。

普段岩村の郊外に住む方ですが、「自分が幼少のころの賑わいを考えると、本通の物件が売りに出されるなんて、考えられないことだった」という言葉が印象的でした。

さらに、「うなぎの寝床」と呼ばれる町家だけに、奥に長く、普段から建物の半分は賃貸で居住されている方がいます。

今回はご厚意で居住スペースも見せていただくことができ、本通からでは全く想像のつかない、町家での暮らし方に、参加者一同驚いた様子でした。

なぜ岩村の町家から人がいなくなり、お店がなくなっていったのか、私たちのアクションによって何かを変えられるのか。ただ建物を直すのでなく、私たちの見据えるビジョンを形にしていくことが、このワークショップの目指すところであることを確認できました。

**【天井板・壁板はがし】**

まずは1階事務所奥のスペースがまだ手をつけておらず、全体に古めかしくなった天井板や壁板をはがし、痛んだところがないかを点検することに。

べきべきとバールを使って板をはがしていくと、薄い板にトタンが乗っただけの作りの屋根の構造が現れました。

屋根のトタンも亀裂が入ったりして、雨が入り込んでいたのが一目瞭然、補修が必要なことがわかりました。

しかし、古い建物の内部構造を見る機会は貴重で、地元で長年活躍されてきた大工さんによる解説に、参加者も関心を引き立てられた様子でした。

**【屋根のペンキ塗り】**

そのトタン屋根ですが、屋根のペンキを塗り替えてリフレッシュしたい、ということで、グループで分かれた参加者が屋根に乗ってペンキ塗りに挑戦。

指導にあたった建築士からは、下の板の痛みもあり、本来屋根ごと替えた方が良い段階、という診断もありましたが、ここでは応急処置にとどめました。

ペンキ塗り作業が初めてという参加者も多く、外で使うのに適したペンキの種類、薄め液の分量、効果的な塗り方など、建築士の指導のもと、作業をあたってもらったのと同時に、普段見る事のない、隣同士の屋根が重なりあい、不思議な空間を醸し出している「町家の裏側の風景」を楽しんでいました。

**【障子張替え】**

家主さん自らが表具屋さんとして活躍されてきたこともあり、2階の陽に焼けた欄間の障子紙の張替え作業も行いました。適切なのりの作り方や、きれいに貼るコツが伝授され、「自分の家の障子も何十年ぶりに張り替えてみようかな」という参加者も。参加者一同、職人の技に魅せられていました。

**【レクチャー・感想等】**

ワークショップの最後に、参加者から建築に関するちょっとした疑問などに専門家が応える時間を作り、「町家の2階がふかふか揺れるのは、梁が細いから。天井が抜けたりするようなものではない」や、「町家は隙間の多い構造になっているので、結露することがない。結露はコンクリート構造の家ならではの現象。昔ながらの家は湿気の多い日本の気候に合った作りになっている。」など構造的なことから実用的なことまで、色々な専門的な話を聞く事ができました。

今回もワークショップ後に交流会を開き、参加者と町の人たちとのざっくばらんな話が交わされ、活動に込めている思いを共有することができました。

**【まとめ】**

今回は、片付けるだけでなく、建物の構造に手を付けるという、前回より作業的には少し進んだ内容となりました。

自分たちの手でむき出しにした梁や柱だけになった部屋を見て、これがどんな姿に変わっていくのか、その期待を膨らませるのには十分な変化でした。自分たちのワークショップが少しずつ前進していってるのを実感すると同時に、今後はより具体的な「作る」作業への期待も感じられ、今後のメニュー作りにつながる1日となりました。

本通りから見える場所で作業を行っていたので、近隣の方も興味を持ってのぞきに来ていただき、中には「自分の家も手直しするつもりなんだけど、一緒にやれるかな」と話していただいた方もいらっしゃいました。

最後には、参加者の中から「町家で実際に暮らしている居住空間を見ることができて、『町家に住む』という今まで考えていなかったことが、魅力的に思えるようになった」という感想もあり、こうした取り組みを続けてきたことで、私たちの思いが少しずつでも届き始めている実感を持てて、活動の大きな励みとなりました。

**【参加者感想】**

- 他の場所での古民家 WS にも参加しているが、町家の再生ということで興味を持ってきた。町家も面白かった。
- ペンキ塗りが初体験。こうした体験をしたかったので満足。
- いろいろ話を聞いてみると移住の壁を感じる。自分で直したりすると、どのくらいの期間と時間がかかるのか。（←回答として、『自分がどこまでを住めるレベルとして考えるかで全く変わってくる。同じ伝建の建物を直した例としては1年半ぐらいかかってる。伝建地区や空き家バンクを利用する場合は、補助が出る場合がある。』）
- 難しそうでもやってみると自分でできることがあるなぁと気がつかされ、できることを増やしていきたい。
- 町家の利活用と、自分の活動をうまくつなげていくことができたらと思った。
- 障子貼りをプロに教わることができたので楽しかった。
- 自分の家の障子を張り替えてみる気になった。

# 第３弾　2014.08.24　at Ｙ邸

第３回目となるワークショップは、第１回に不用品整理を行った家屋に会場を戻し、開催。

前回、不用品を整理し、出現したスペースを見て、「早速何かに使ってみたい」という声があがり、岩村のディープな姿をたくさんの方に見てもらう絶好の機会として、１１月開催のおかげまつりでこのスペースをオープンにしてみることを計画しました。

想定としては、**「壁板を張って、棚を設置する」**だけで何とかなるかな、と楽観視してましたが・・・

この部屋、四隅の土台や柱が腐り、雨水が浸入してきている他、強度的にも不安があり、まず腐った土台を入れ替える必要があることがわかり、これをどうにかしないと部屋として使えない・・・

しかも隣の家屋が密着し、外側からの作業が物理的にできない町家ならではの事情により、雨水の浸入を防ぐには、基礎を高くする他にありません。

なにやら大事になりそうな予感がひしめく中、今回は、基礎と土台再生の準備として、壁を取り除き柱を浮かした状態で固定する作業を行いました。

**【作業①】 壁を取り除く**

基礎を上げ土台を入れ替えるために、今の土壁をある程度取り除くことが必要になります。土壁はバールで突くと、あっけないほどにぼろぼろと崩れます。中からは竹をわらで編んだ格子状の下地が出てきました。

監督に来ていただいた大工さんから、土壁は調湿機能に優れ、日本の建築にあっているとの説明がありましたが、このような手間がかかっているんですね。これを作るまでも大変だったんだろうな～。

とはいえ、基礎をあげるためには取り除かざるを得ないので、思い切って壁に穴を開けていきます！

この壁の他にあと2面の壁の下部を崩し、次の作業を待ちます。

**【作業②柱の固定】**

そして本日の最終工程。柱を切り上げるために、柱を固定し少し浮かせた状態で保つ作業です。これをしないと柱を切ったときに、支えるものがなくなってしまい、家が傾いてしまう、とのこと。

この作業の主人公は、NPO 法人いわむらでんでんけん代表の鈴木繁生さん。ホットいわむら副会長でもあり、でんでんけんでは町家などの伝統的な工法等を研究し、伝建地区の保存活動等に取り組んでいます。

さまざまな大きさの木材を運びいれて、壁に沿ってやぐら状に3組くみ上げます。そこに長い木材を横たえたら、今度は木材を建物の柱に打ち付けて固定、さらにワイヤーでしっかり縛り付けます。

ワイヤーにゆるみのないように、くさび上の木材を打ち込んだら・・・

ジャッキで柱ごと建物を浮かせます!!!

見た目に柱が浮いているように見えませんが、確実にみしみしと土台から柱が離れようとしている音がしていました。これで柱を下で切っても、家が傾くことはありません。

この作業には、実に3時間弱の時間がかかっています。古い町家の再生、と一口に言っても、土台を直す準備をするのに、これだけの作業が必要なのには、驚きました。素人には難しいこの作業を間近で説明をしてもらいながら見学できただけでも、非常に興味深いものがありました。

さらに、隣の家屋との密着感、ほとんど壁を共有しているような状況が、さらに再生のハードルを高くしていることもよく理解ができました。

**【番外編】**

今回のお家にはまだまだ以前の生活の名残があり、今となっては珍しいものもあります。

そこから見つけたのがこれ。

今ではお目にかかれない、家具調のステレオ。LP とラジオしかありません。おそらく昭和40年代のもの。残念ながら配線が死んでいて、音を聞く事ができません。

が、これの再生にもチャレンジしようと、スタッフK氏が家に持ち帰りました。

果たして、どのような再生が施されるのか？そして、今の時代 LP の使い道があるのか？色々と企画中です！今後の情報にご注目ください！

# 第４弾　2014.09.14　at Ｙ邸

前回ワークショップで、Ｙ邸での作業を進めるうちに、雨水の浸入は思ったよりも建物にダメージを与えており、町家ならではの隣との密着した作りが余計に補修を容易にしていない現状に突き当たりました。

小さな空間と言えども、改修には思ったよりも時間が必要。より多くの空き家に着手し空き家対策の波を広げたい、という当初の意向はあるものの、スタッフで話し合い今後のワークショップ会場をこのＹ邸に集中し、一先ずの区切りが付けられるまで続けることに決定しました。

そうして迎えた第　４　回目のワークショップ。前回行った、「腐った土台と柱を切り上げ、雨水を防ぐために基礎を高く打ち直す」ための準備として「柱を切り上げる際に、建物が傾かないように、台座に柱を固定しておく」という作業の続きとなりました。

メインとして「新しい土台を柱にはめ込み、コンクリートで基礎を打つための鉄筋を組む」作業を行いました。

**【作業①土台作り】**

まずは、切り上げた柱の高さをそろえて、新しい土台をはめ込むための「ほぞ」を作りました。

すでに立っている柱を下からのこぎりでほぞを作っていく作業は、一般人には至難の技。それでも３本の柱にほぞを作ることができました。

次に新しい木材を土台にするために、今度は「ほぞ穴」を彫る作業。

先ほどの「ほぞ」がぴったりはまるように、位置関係を正確に記しておきます。

今回は、昔ながらの工法を体験するという名目で、ノミを使って手で掘っていきました。

2×10　センチ程度の面積を深さ６センチほどまで掘る作業でしたが、こちらもなかなか骨が折れます。

彫り終えた土台に防腐剤を塗ったら、いよいよ柱にドッキング。

と思ったら、若干ほぞと穴の位置がずれたりして、2 回ほどの修正が入りましたが・・・

最終的に、見事にはまりました！

本日一番の盛り上がりでした！

**【作業②鉄筋組み】**

今回、土台の下には、鉄筋を組んでコンクリートの基礎を高く上げる、という手法をとることにしています。そこで、基礎の強度を上げるための鉄筋を組む、という作業が必要となります。改修しているスペースにはもともとコンクリートの土間が打ってあるので、ドリルで穴をあけ、鉄筋を打ち込んでいきます。

横にも鉄筋を配して、結束線をハッカーという道具で結わいて完了。

補修が必要な壁 3 面のうち 2 面でここまでの作業を行い、今回は終了しました。

今後は、この鉄筋部分に枠を組んでコンクリートを流し込み、基礎を完成させます。

**【まとめ】**

徐々に補修も段階が進んでいくにつれ、作業が**「壊す」**や**「取り除く」**から**「組み上げる」「取り付ける」**へと変わっていき、参加者一同今後に向けた手ごたえを感じることができました。

最後に参加者で感想を出し合いましたが、**「何回か参加して作業をしているうちに、この建物にどんどん愛着が湧いてきた」**という感想をいただきました。古いものを壊すことは簡単ですが、少しでも作業に関わる事で、町の空き家を身近に感じて大切にしたい、という気持ちを多くの人に持ってもらうことは私たちの願いでもあります。

（ご近所さんも見に来てくれました）

## SPIN OFF ： 城下町お色直し計画

岩村城下町の看板でもある、観光案内所。もともとは銀行として使われていた古い建物。色あせてきた玄関をみんなでペンキを塗ってお色直ししました。

# 第５弾　2014.10.13　at Ｙ邸

**（前回までのあらすじ）**

ワークショップの主戦場となった、ｙ邸では、部屋に侵入する雨水への対処によって、想定外の作業へ突入。

町家ならではの構造によって、外側からの処置が困難なため、部屋の内側から雨水の浸入を防ぐために、鉄筋を組み、コンクリートで基礎を高く上げることに。

慣れない作業に、厳しい？指導の声が響く中、何とか土台のはめ込みと、鉄筋組みが終わったのでした。

**（自主活動編）**

基礎を作るための木枠にコンクリートを流す作業は、町の職人さんたちにお任せし、ワークショップとは別に行いました。

⇒

しばらくの間、建物を支えていたやぐらも取り外され、新しい土台と基礎がしっかりと柱を受け止めています!!

ついでに、水分の上がってきやすい以前の土間部分にもシートを敷き、その上からコンクリートを流し込み床の高さを上げ、湿気をシャットアウト。

基礎と土間の再生によって、やっと雨水の浸入の心配がなくなり、ようやくスペースとして使うためのスタートまで来ることができました。

この時点で、すでに部屋の様相は以前と別物のよう。今後どのように再生されていくのか、胸が高鳴ります!!

⇒

（本編）

これまでは雨水の浸入を防ぐという、利活用以前の作業でしたが、今回から、どのような使い方をしていくのか、というソフトな視点からの作業に移ってきました。

Y 邸は、いわゆる「うなぎの寝床」と呼ばれる横に長い作りで、全てを改修していくにはかなりの費用と時間が必要となります。

条件が整うのを待っていると何も動けないので、少しでも使える部分から使ってみようと、11 月に岩村町で行われる一大イベント「いわむら城下おかげまつり」の中で、イベントブースとして利用することを計画しました。

そこで、これまでコンクリートブロックが積み上げられていた壁面に、壁板と陳列棚を取り付け、内装を手がけることに。

**【作業①壁板張り】**

あらかじめ打ち付けておいた下地に杉板を丸頭釘で打っていきます。丸釘を使う理由は、仕上がりがきれい、とのこと。

コンプレッサーを使って、バシバシと打っていく方法もありますが、ここは手作業で、作る楽しさを味わいます。

**【作業②陳列棚作り】**

イベントスペースとして物販などを考えたときに、やはり陳列棚が必要だろうということで、作成することに。

材は、スギとヒバの 2 種類の集成材を使用しました。ネジをインパクトで打ち込んだり、カンナを使った「面取り」も経験することができ、立派な陳列棚が 2 つ出来上がりました。

内装を少し整えただけで、もはやかび臭く暗かった部屋のイメージはありません。

早速イベントでのポップアップストアとして企画している、レコードショップを想定して陳列。

y 邸から出てきた家具調のステレオも、スタッフの手によって修理・再生され、レコードを流してみると、本当にお店みたい!?

自分たちでここまで直して作り上げた成果が眼に見えて現れたことに、一同達成感を味わうことができました。

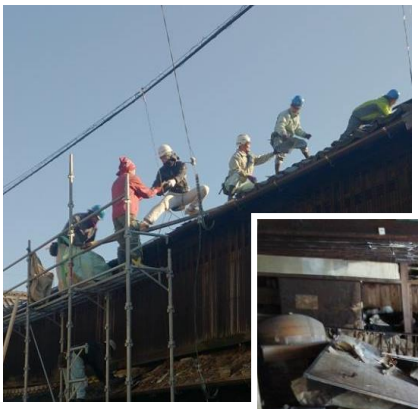
まだ土壁を取り除いた面などの処置はされていませんが、おかげまつりでのイベントブースとしては、十分に「使える」スペースまでたどり着きました。

何とか形にすることができたこのスペース。たくさんの方に再生された現場を訪れていただき、古いモノが再生されることの魅力を共有していただけたら・・・。どんな反響が生まれるのか、楽しみと不安を胸に抱きつつ、その日を待つのでした・・・

# Side story:空き家対策の拡がり

このようにして私たちは空き家の存在に光を当て、「資源」としての空き家活用を発信してきました。全国的にも「空き家」というキーワードをメディアが採りあげない日はない、という状況も手伝ってか、町内では少しずつ他の空き家でも利活用に関する動きが出てきました。

その一つが、こちらの通称「K邸」。



伝建地区でもひときわ大きな建物で、広い間口の2階を覆う格子窓がとても印象的。

築8～90年と言われる木造2階延べ約 280 平方メートルのこの空き家では、かつては染色業を営んでいましたが、約 25 年前から空き家となっていて、昨年夏についに解体の話が持ち上がりました。

そこからが急展開、ほとんど解体直前に差し迫ったその時、住民有志が「この建物を失うのは岩村の損失」との想いで、取得に動いたのでした。

こうした、空き家を取得し有効な利活用に向けて再整備を行う事業体の必要性を、もともと住民の中で感じていたこともあり、この建物を岩村観光の拠点とするべく宿泊施設に改修する計画を立ち上げ、それに伴い住民による「まちづくり会社」の設立が具体化して進行しています。

この先増え続けていくと予想される空き家問題に対して、住民自身が前向きな解答を出そうとしています。

やれることは自分たちでやる。岩村の人々が当たり前のように口にするこの言葉そのものが、まさに「岩村流」ともいえる町の大切な宝ものなのかもしれません。

**町の人に聞く「岩村の空き家問題」　宮澤博光氏（岩村地域協議会会長）**

全国的に空き家問題はこれからの人口減少の流れと時代の流れの中、大きな問題です。岩村においてもこの 4,5 年たくさんの空き家が出て来ました。

特に伝建地区内では取り壊す事は景観上あまり許されることではなく（文化財保存建物以外、強制力は有りません）更地が出来、虫食い状態となった時、今までのおもむきのある城下町が、ただのどこにでもある田舎の町となってしまいます。

それには、空き家をリノベーションしてなんらかの行動を起こす事が歯止めになると思い仲間と立ち上がりました。

空き家を改修してゲストハウスを運営していくことは一つの事業ですが、そのような取り組みが町の人達の意識を変え、少しでも町を愛する気持ちを持っていただけると思っています。自分達が起こした、町づくり会社（㈱え～ないわむら）は、このように空き家に住んでもらう為にも家主さんと借主の間の人間的な仲介の事業も展開していきます。

今、町内ではこの 2,3 年何人かの芸術家、工芸家の方達が移住され空き家を修復し、活動されています。この人達が岩村の良さを発信し彼らのネットワークをつかって新たな人を呼び込む事が出来るよう自分達は陰ながら応援、サポートしていくつもりです。

# Epilgue:2014 いわむら城下おかげまつり『想ひ出レコードショップ』

いよいよ、迎えた「いわむら城下おかげまつり」。このイベントは、岩村町が長年続けてきた「岩村町産業祭」をリニューアルし、重要伝統的建造物群保存地区の町並みを岩村の宝ものとして町民自身が末永く守っていくことを目的としとして３年前より開催されています。

そのイベントの一つとして、今回このスペースと活動のPRを兼ねた企画に取り組みました。

今では、聞かれることの少なくなったレコード盤。ここ岩村では、古くから続くお家が多いためか、昔お家で聞かれていたレコード盤が多く残っている、ということを耳にしていました。

こうしたレコードを集めたら、町の人がどんな音楽を聞いて暮らしを営んできたのか、その背景となる景色が音楽で見えてくるのではないか。

また、実用としても、一部のレコードリバイバルな方たちでも欲しいものが結構出てくるんじゃないかと、前々からこの種の企画を考えていました。
その場所として、今回建物を「再生」したこの空間は、町の人の想い出を「再生」する場所として、とても合っているような気がします。
そこで、町の方々にレコードの寄付を呼びかけたところ予想以上の反響で、レコードを持ってきていただきました。
当時流行していたと思われる映画音楽集や歌謡曲、立派な装丁のクラシックもあるし、これはお宝！？と思えるような名盤もあり、ラインアップも充実。

いただく際に、そのレコードにまつわる想い出も聞かせていただくのですが、ワシの青春の思い出だとか、息子が好きでね、とか、なんだかレコードを透けて、その人の人生に少し触れさせてもらった気がして、豊かな心地がしてきます。

ご寄付いただいた皆様、貴重な想い出を寄せていただいたご厚意に心よりに感謝いたします。

当日、Y邸は本通りを少し奥に入った路地にあるため、お客さんからわかりづらいかなと心配もしましたが、すこしずつお客さんも出入りし始め、町の方はもちろん、レコード収集を趣味としている方や、ジャケットが懐かしいと見に来てくれる方など、多様な世代のお客さんに訪れてもらえました。

ご近所の年配の方は、タンゴのレコード盤を見つけられたときには、「ワシは三度の飯よりタンゴが好きなんだ」と言って、少々砂っぽいノイズの混じった音にジィーと座って耳を傾けていました。普段から顔なじみの方だっただけに、意外な一面を見せてもらえたことが印象的でした。

ある町外からのお客さんからは、普段表からしか見ることのない町家の裏側の姿やそこを再生しようとしていることに興味を持たれ、町に活気をもたらそうと動いている人たちの存在を知ることができてよかった、との感想をいただきました。

このお家でもきっといろんな音楽がこのプレイヤーから流れていたに違いない。主を失ってから、ここからまた音楽が聞こえてくる日が来るとは、もしかしたら町の方たちは思ってもなかったかもしれない。

時の流れが止まってしまったかのような空き家に入ると、少し出入りをしただけで、淀んだ空気がかき混ぜられるような錯覚がします。

少しそこで作業をしただけで、まるで冷えた身体に血の気が巡ってきて温まったかのように感じる瞬間があります。

私たちはそこで確信しました。「家は生き物」だと。

少しでも町に気持ちを温かく豊かになれる場所が増えたら。

そんな気持ちで始めた取り組みですが、当たり前に思っていた家の灯りは、そこに住む人が点していたから、という「当たり前」のことに気が付きます。

そして数々の修復作業を自分たちで手がけることで、一度消えたら再び点すことの困難さを知り、自分たちが今暮している場所がこの先も続いていくことが決して「当たり前」ではないことにも気が付きます。

この先、ますます岩村にも空き家が増加してくることが予想されています。急速な少子高齢化なども含めて社会的に今まで当たり前のことが当たり前でなくなる。そんな時代であることに私たちが気づいて行動していくこと、それこそがこのワークショップがもっていた意味なのかもしれません。

空き家再生ワークショップ　実行メンバー

〇鈴木繁生　（スズキ設計代表、NPO法人いわむらでんでんけん代表、城下町ホットいわむら副会長）

〇加藤哲也　（岩村町飲食店経営、城下町ホットいわむら委員長）

〇秋山豪　　（秋山建設、NPO法人いわむらでんでんけん理事、城下町ホットいわむら副委員長）

〇中田誠志　（美濃丈プランニング代表、恵那市ふるさと活性化協力隊員OB）

〇佐藤暁彦　（恵那市ふるさと活性化協力隊員）

協力：秋山博康（秋山建設代表）、小栗左官、佐々木建設、みはら、かんからや

清和堂スペース、岩村振興事務所

岩村町、恵那市への移住・定住相談窓口

**恵那暮らしサポートセンター**

恵那市役所　総合政策課ふるさと活力推進室内

恵那市長島町正家 1－1－1　電話：0573-26-2266（直通）

発行／城下町ホットいわむら

恵那市岩村町 209－4　電話：0573-32-1109

このパンフレットは「平成26年度恵那市地域の元気発信事業総合助成金」を活用しています。